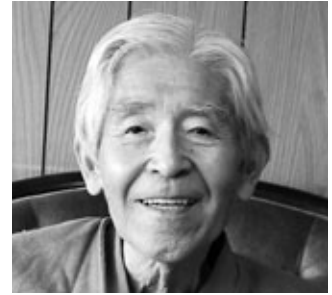


「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



白木 弘遵さん
昭和3年7月12日生まれ。
大通6丁目在住

生まれ育った場所

私 は昭和3年7月に西然寺の3代目として生まれました。この寺は、明治32年に布教を開始し、同39年、説教所を創立、大正8年に寺院が完成しました。その後、現在地へ移転したのは大正15年7月のことです。

昭和初期には桜寺の名で桜の名所として親しまれ、寺の欄間には貴重な彫りものが現在も残っていて、本堂に荘厳さを増してくれています。

小中学校の思い出

寺

の境内から現在の音更小学校が見えますが、私が通った頃とは少し位置が変わっています。当時の私は、校門をくぐり、二宮金次郎の

銅像へ頭を下げてから教室に行くのが日課でした。冬の校舎は寒く、用務員さんが鐘を引って張ってチンチンと音を鳴らし授業が始まりました。

旧制帯広中学校（現在の帯広柏葉高校）に入学した昭和16年、太平洋戦争が始まりました。私たちは学業どころではなく、油をとるために松の根っこ掘りや、ベニヤ工場で飛行機のプロペラ用合板作りをしました。また、各地で鉄砲の弾を作るために金物の回収が始まり、お寺のろうそく立ても供出しました。

旧制二高へ進学、 肺結核に

昭

和20年4月、仙台市にある旧制第二高等学校（現在の東北大学）へ進学しました。戦争激化で空襲警報が毎晩鳴り響き、深刻な食糧不足で毎日が空腹でした。

3年生の終わり頃、ひどくせきが出るので大病院で受診すると、肺結核と診断されました。治療のため音更に帰ることになり当時の国立療養所に入院。一時は咯血もあり

ましたが、治療のかいあって完治しました。その後、旧制二高の旧知の先生の勧めもあり、北海道大学文学部哲学科に入学。在学中に国語や英語の教員免許を取得し、修士・博士課程修了後の昭和33年に、再び音更に戻ってきました。

帯広大谷短期大学 創設に情熱を注ぐ

私

は寺の住職の仕事を手伝いながら帯広大谷高校の教員になり、国語を教えました。その後、帯広大谷短期大学創設のため、教員確保や学科編成に奔走、認可申請のため文部省に行って要請活動も行いました。苦勞が実り、文部省から正式に認可の連絡があった時の感動は生涯忘れることはありません。昭和35年に開校し、私は国文科で教鞭をとりました。

昭和63年、帯広大谷短期大学は、音更町の現在地に新校舎を建て、移転開校しました。短大が音更町と協力しあい、生涯学習に力を入れていることは、この地に生まれた者として大変良かったと思います。



彫刻家 西田秀氏が彫った貴重な欄間

次の世代に 伝えたいこと

地

域に根差したお寺でありたいと願って歩んできました。次の世代の人たちには、自分の周りのことだけではなく常に視野を広く持ち、たとえ対立することになっても、おらかな包容性で融和していくことを心がけてほしいと思います。大変苦勞のいることでも、相手に尊敬の念を持つて長い間ご苦勞さまでしたという気持ちで接しながら「温故知新」という言葉のとおり、古いものを訪ね求めて、新しい事をどんどん知ってほしいと願っています。